

葉

言

の

頭

卷



目に見えない世界

一口に神や仏、先祖の靈といつても、一般の人々には姿も見えず、声も聞くことさえ出来ません。経験主義。実証主義の現代社会について、その実在を信することは、まさに困難であり、一面から見れば滑稽なことであるかも知れません。

然し目に見えない靈の世界、そこには三千大千世界の虚空にあふれるばかりの地涌の菩薩たちが、久遠の本仏釈尊を中心として、おのの光を放ちながら法華經を誦誦し、お題目を唱えているのです。法華經の信仰とは、その姿なき姿、声なき不滅の声を信することです。曾って小数の、ごく少数の人々が、この実在を徹見しました。日蓮大聖人もその一人でした。それらの人々は、同時に六導に輪廻する無量の精靈の姿も見、また精靈の苦しむ声も聞きました。そして上は仮界をたゞえつゝ下は六道悪趣の靈を救つて行きました。無常転変する現象世界、それは目に見えない世界の一駒にすぎないのです。

一鷲峰一一月号目次

第2卷・第11号・通巻17号

卷頭の言葉　目に見えない世界——1

自我儀義 第2回

久遠の本仏と人間釈尊——日高白象 3

犠牲者の手に思う——阿部敏夫 10

信仰相談室

どうすれば罪障は消滅するか——日高白象 15

北陸・関西・九州

街頭布教紀行——編集部 21

血の通った仏像——佐々木友学 9

教義説明／患者と賢者——武内祥起 14

信仰相談歓迎——20

編集後記——51

表紙題字／身延山法主藤井日静院下

表紙写真／インド靈鷲山へ渡る身延山金剛の釈尊像

表紙印刷／大阪東洋印刷社々長藤原秀憲氏寄進

久遠の本仏と
人間釈尊

その2

日高白象



まず自我偈の冒頭、第一行の経文、

自我得仏來 所經諸劫數

無量百千万 億載阿僧祇

我れ仏を得てよりこのかた

経(へ)たる所り、もうもうの劫數

無量百千万億載阿僧祇なり

という字句の解釈からしてみましよう。

この中で、日頃、見かけられもせず、また意味も理解し難い言葉は、「阿僧祇(あそぎ)」という言葉と「劫(こう)」という言葉です。

この言葉は、両方とも一般では使用されていない古い仏教専門用語であって、阿僧祇というのは、梵語アサンキヤの音訳で、無数を意味しており、劫というのは、梵語カルバの音訳で、想像することも出来ないほど悠久な時間の単位を意味しているもの

です。

いうなれば、阿僧祇とは無限の数であり、日本の里数にすれば三・六里に相当するも

劫とは無限ではないとしても、無限に類するほど長時間の単位と申せましよう。

今、劫の悠久時間があらわす譬えをあげれば、古来「芥子（けし）劫」と、「磐石（はんじやく）劫」という譬えがあります。芥子劫といふのは、四方上下、共に一由旬もある鐵城に、実の中でも最も小さな芥子の実を一杯に満し、百年ごとに一粒粒子を取り去って、遂に城中の芥子粒全部を取り尽しても、一劫の時間は終らないといふのです。

由旬といふのはヨージャナの音訳で、牛車の進む一日の行程を意味しています。この行程にも色々異説がありますが、マクドネルの梵英辞典では約九マイル、即ち十四

。四キロメートルとされています。これは日本の中里数にすれば三・六里に相当するものです。

そこで今、由旬を十四・四キロとすれば芥子劫といふのは、高さも十四・四キロ、周囲も十四・四キロ四方といふ鐵製のお城一杯にみたした芥子粒を、百年ごとに一粒ずつ、お城から取り出し、こうして一粒残らず取り出すことが出来ても、まだ尽きない時間といふのですから、億や兆の単位でさえも数えられない、天文学的な時間といふことが出来ましよう。

次に磐石劫といふのは、一由旬立方（十四・四キロメートル立方）の大きな岩があつたとして、この岩を百年に一回、天上界から舞い降りて来た天女が、その羽衣の袖で、軽く一度なでることを繰り返し、この

ため遂に、その岩がすりへって無くなつてしまつても、この一劫の時間は終らないといふのです。

いずれにしても一劫とは、何時かは尽きる時が来るとしても、およそ数えることは愚か、想像することも出来ない、悠久な時間であると申せましょう。

ところで自我偈の冒頭では、

「もうもの劫数」

といつて、劫の数を单一ではなく、複数

で示し、しかもその複数は、

「無量百千万億載阿僧祇」

という、無限大の数で表現されているのです。

こゝに無量というのは、劫数をあらわすものですが、然し、この言葉だけでは、あまりにも漠然として何がどうかがなく、実

感も湧いて来ません。そこで実感的な有数を、しかも小さな単位から、大きな単位へ無量の意を、有数に即する無数という形式で、より具体的に、より実感的に表現しようとしました。

既に一劫でさえ、想像することも出来ない悠久な時間です。この単位時間が無量百千万億に乗ずる阿僧祇（無数）というのでですから、「我れ仏を得てより、経たるところの」時間というものは、とりもなおさず無始久遠というほかはありません。

ところで、こゝにいう「我れ」というのは、今よりおよそ三千年の昔、インドの国カピラ城の王子として生れ、二十九才で出家し、三十五才で悟りを開かれてより、八

十才で入滅されるまで、仏教を説き明かされた人間釈尊そのものゝことですから、問題が、やゝこしくなって来るのであります。

何故ならば、宇宙大自然の流れの中に、たとえ「もろもろの劫数、無量百千万億載阿僧祇」という無限時間を認めることが出来たとしても、

「三十五才で仏道を成した人間釈尊が、実は無始久遠の昔より成道していたのだ」ことは到底、考えもされないことであるからです。

この疑いについて、法華經如來壽量品第十六の長行の初めには、釈尊みずから、もうもろの菩薩、及び一切大衆に対して、次々の如く仰せられています。

汝等 あきらかに聽け

如來の秘密・神通の力を。

一切世間の天・人、及び阿修羅は皆、今釈迦牟尼仏、

釈氏の宮を出でて

伽耶城を去ること遠からず

道場に座して

アノクタラニミヤクニ菩提を得たり
と思えり。

然るに善男子

我れ實に成仏してよりこのかた

無量無邊百千万億那由陀劫なり

この經文を意訳すれば、

「もろもろの菩薩大衆よ、如來の秘密・神通の力をもって説く私の教えを、心して聴くがよい。これから説く私の教えは、唯仏与仏、仏と仏にしか通じない仏知見によつて聞出されるものである。従つて、此の仏知見の道に入つていな人々には、理解す

ることは出来ない。

地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上と
いう六道の迷界に輪廻している世間一般の
人々は、

間とさうものは、三十五才の菩提樹下以来
という有限なものではなく、無量無邊百千
万億那由陀劫（想像も出来ない無始久遠）
なのだ』

（今釈迦牟尼仏は、釈氏の宮（釈迦族の

といふのです。

王宮カビラ城）を出て修行し、伽耶城（今
日のブンダガヤの町）を去ることほど遠く
もない尼蓮禪河のほとり、菩提樹の下に端
坐して、十一月八日の未明、夜明けの明星
を仰ぎつゝ、遂にアノクタラミヤク三菩
提（無上正覺の境）を開いた）

と思っている。

然し、一心に仏道を求むる、もうもろの
菩薩大衆よ。彼等は仏知見の偉大さを知ら
ないため、たゞ外見によつてのみ、そう思
つてゐるに過ぎない。

実は、私が仏道を成じてより経過した時

少々意訳しきましめたが、賢明なる読者は、これによつても既にお判りになられる
通り、仏知見も仰がず六道の迷界に輪廻し
ている一般の人々には、

（釈尊は三十五才で、初めて悟りを開かれ
たのだ）

としか思うことは出来ないので。これ
に反して、仏知見の世界にあつては、釈尊
みずから宣言されてゐるようだ、

「我が成道は一往、三十五才より始まつて
いるようではあつても、実は無始久遠の昔
より既に悟つていたのだ」

ということが出来るのです。

従つて釈尊を仰ぐ人々の、仏知見の道にあるか、ないかによつて、人間釈尊に関する仏身の、有限觀と無限觀とが生ずる、と申せましよう。

ところが古来、法華經を信奉して來た人々の中にも、また今日、法華經を信奉してゐる日蓮門下の人々の中にあっても、如來壽量品の長行の巻頭、或は自我偈の冒頭において、釈尊みずから久遠実成の本仏であることを宣言されたことによつて、人間釈尊の奥に、久遠の本仏を想定し、

「久遠の本仏が、インドの釈尊として應現されたのだ」という考え方をして來ました。

然し、久遠の本仏といえば、その生命は、前述の如く、無量百千万億載阿僧祇劫とい

う、想像にも絶する無限の時間に亘るものである以上、それは人文史以前の人間、宇宙成立以前の人間ということになつて、今日の科学と全く矛盾してしまうのです。

なるほどキリスト教では、天地を創造した神の実在を説いています。釈尊の在世時代にも、バラモン教では、キリスト教の神に類するが如きブラフマン（梵）という神を説いていました。然し釈尊は、そういう神の神格を否定し、これを正法擁護の一善神として止揚されてしまわれたのです。

そこで、

「久遠の本仏は、人間釈尊を超越した実在である」

という考え方によつて、矛盾を感じる人々は、

「久遠の本仏とは、釈尊の悟られた真理そ

のものを人格化したもの、いわゆる法身仏である」

と主張しました。

然し、そのいずれにしても、仏知見という立場から離れた見解であり、六道輪廻の迷界に至る凡夫の知見を出ないものと申せよしよう。

何故ならば、釈尊一人のみ仏知見に住して、みずから久遠の本仏たることを宣言されたのですから、その時の人間釈尊そのものを久遠の本仏と仰ぎうることこそ、仏知見の道を行する法華經信仰者の立場であると思うからです。

(以下次号)

今年の春頃、古代インド美術展が東京や京都で開かれました。陳列された多くの仏像、その多くはお釈迦さまの仏像でしたが、いずれも素晴らしい彫刻であり、あたかも人間の血が通っているかのようでした。

そしてこれ等の仏像を通して古代インド人が如何にお釈迦さまを愛慕渴仰していたかという生きた信仰に心うたれずにはおられませんでした。

それに較ぶれば日本の仏像は、あまりにも人間性を失っているようです。信仰の血が通っていないのでしょうか。本仏釈尊を本尊と仰ぐ私たち日蓮宗の信者としても、深く考えさせられることでした。

学二 佐々木 友学

犠牲者の手に思う

これは身延山弁論大会において
第一位法主賞を獲得した
弁論の原稿である

身延山高校2年

阿 部 敏 夫

去る十一月三日の「文化の日」を中心にして、前後三日間、身延山大学高校の学園祭が開催された中で、第三回法主杯争奪学生弁論大会が、身延山高校講堂において、身延山学園弁論部主催のもと、身延山久遠寺、読売新聞社、山梨日々新聞社、山梨放送局の後援によって開催された。

参加校は、身延山大学高校はもとより山梨県下より甲府工高、市川高校、増穂高校、湯田高校、甲府第二高校、遠くは東京立正大学、神奈川厚木高校、長野松商学園高校、愛知中京女子高校、京都女子高校。

以上十二校代表三十余名の学生弁士によつて華々しい舌戦が展開され、身延山高校二年の阿部敏夫君（岩手県出身）が第一位法主杯を獲得した。以下本文は、その原稿である。

（編集部）

☆ ☆ ☆

働き通したベカスツリーニは、その頃、無学文盲だったのです。

イタリアの、ある実話ですが、一人の炭鉱夫が、作業中に、タバコを吸つて、その吸いがらを、良く消しもしないで捨てた為に、吸いがらが、ダイナマイトの箱に入り、まさに爆発せんとした瞬間、そばにいたベカスツリーニという人が、それに気付き、その箱を谷底へ投げつけました。

ダイナマイトは、投げられると同時に爆発して、ベカスツリーニは、重傷を負い、命だけは、どうやら、とりとめたものの、両眼はつぶれ、両耳はもぎとられ、右手の指二本、左手は、たった一本残して、七本の指は、全部なくなってしまったのです。

過去二十年間、炭鉱夫として、はじめてして、活字となつて現われるのを、無上の

しかし、人生一大不幸に直面して、ベカスツリーニの生活態度は、すっかり變つてしまつたのです。

中年になつても、文字一字書けなかつた彼でしたが、彼は文盲であつても、精神だけは立派だったと思ひます。

彼は決心したのです。両眼は失われてから、勉強をやり出しました。

そして、不具者に適した職業を……と、あれこれ考えた末、タイプを習いました。

残つた三本の指を動かして、巧にタイプライターをたたき、余暇をみては、詩・歌小論文を作成し、それを新聞、雑誌に発表

楽しみとしておったのであります。

ツリーニは、

たまたま彼の作品を、イタリアの皇帝や皇后陛下が御覽になつて、非常に感心されました。そして両陛下が、おそらく御馳走を仰付けられることになったのであります。

その時、皇后陛下は、ベカスツリーニの手を、しっかりと握りしめ、

「この手はイタリアの手だ」

とおっしゃられたのです。

最大の面目を施して、我が家に帰つた彼

は、

「こんなきいたない手が、どうして、イタリアの手なんだらう」

「無学文盲で、何一つ取柄のない自分の身

体が、どうして、イタリアの宝物なのだろ
うか」

と、一晩中、寝ないで考えましたベカス

へそりだ／私は今まで、此の手を、自分

の手だと思っていた。だから、余り良いことが出来なかつたのだ。それが間違いであつたのだ。この手は、自分の手であつて、

決して、自分の手ではないのだ／

と、この時、はじめて悟つたのであります。

皆さん、ベカスツリーニの手は、本当に、イタリア人だけの手でしようか。

私は、たとえ皇帝が、彼をおほめになつて、「イタリアの手」と、おっしゃられたとしても、絶対、イタリアの一国だけの手ではないと思います。

犠牲・献身・博愛を表現している彼の手は、実に、世界人類の手であると思ひます。こゝにいる私共は、共に日本人であります。

す。お互が持つ、この左右の手は、決して、類から預っている尊い手であります。共に、日本人だけ、ましてや、自分だけの手では、ありません。

どのような手であっても、自分の手の使

いよう如何によつては、私、個人の手が、実際に、大きな、広い世界を、利益する公の手となりましよう。

私共、一人一人が、小さな自分の手を、善い事、社会に役立つ仕事のために働かせる時、必ずや、人類の手となり、一国の宝物となるのです。

私は、この私の意見を、単なる、子供だましの言葉として、聞き流していたときたくさんございません。

皆さん、自分の手を見て下さい。そしてその手を、胸にあて、下さい。その身体は、手は、日本の宝物なのであります。世界人

心があるかどうか、試練の的は、現実の問題として、今、この私共の目の前に立ちふさがっているではありませんか。

人生街道において、児童の自殺、少年の非行化と、何故、我々の仲間から、この日本、世界を背負って立つ、私共の仲間が、このような、悲しい業の結果が生れなければならないのでしょうか？

これです、私共は、このあずかった、二本の手に、今こそ、勇気をふるい起し、団結して、文化の建設、平和社会の実現にあたろうではありませんか。

いかに厳しい現実の壁が、前にたちふさがつていようと、その壁を作り出した当

事者は、外ならぬ人間、我々の手であります。

人間の作った壁であるならば、結局、その壁を、打ち破って、前に進むのも、私共人間、この手でなければなりません。

これこそが、ほんとうの自己の描く夢であり、持つところの希望であり、求め進むんとする道なのであります。

私共の持つ手も、そして私共のかけで、一本の指、三本の指で、世界を見守つてゐる色々な、数多くの犠牲者のもつ手も、すべて、世界人類から預った手であります。預った、この二本の手をのばし、互に結びあつて、大きな輪の実現まで、発展させ築き上げていこうではありませんか。

賢き者は人をひきえる

日常生活の中では、いたる處で、人をのしり、あざわらう声を耳にします。そのたびに、のゝしつている人、あざわらつている人の心の中を、静かにたずねてみるとゾウと鳥肌の立つ悪寒を感じます。

そこには自分より勝っている者に対する抵抗、嫉妬という感情、自分より劣っている者に対する安堵、軽蔑という感情、そういったギシギシした自我の、抜き難い妄執がうずまいているからです。

これに反して賢者は、自己を計算に入れず、たとえ如何なる患者、愚人の中にも、何時かは必ず磨き出されて来るであろう美点をみつめて、これをたらえます。それは大らかな温い心です。
▲高二 武内祥起

—信 仰 相 談 室—

どうすれば罪障は

消 滅 す る か

〈そ の 1 〉

解 説 日 高 白 象

おたずね

法華經の結絆「觀普賢菩薩行法經」の中

一切の業障海は
みな妄想より生ず

若し懺悔せんと欲せば

端座して実相を思え

衆罪は霜露の如し

慧日よく消除す

という經文があります。これによれば、
「すべての罪障は、悉く心の妄想により起
つてゐるものであるから、端座して諸法實
相を觀法すれば、如何なる罪でも、それを
も太陽の光りに照された霜や露のように、
たちまち、そのかたもなく消えてしまつ
とうように解釈されます。

まことに結構な経文ですが、然し端座して心を正し、観念觀法するくらいのことでも果して過去に犯した無量深重の罪障が、たとえ、たちまちでなくとも、消滅出来るものでしようか。日蓮聖人は罪障消滅についてどのように教えられているのですか。

おこたえ

まず觀音菩薩菩薩行法經の一節より説明することにいたしましょう。こゝに、

一切の業障海は

みな妄想より生ず

という妄想とは、妄（みだり）な想（おもい）という意味もありましょうが、それよりも、もっと広範囲な根本的意味で、仏知見によらない凡夫の心というものを総称しているものです。

そこで「一切の業障海は、みな妄想より生ず」ということは、仏知見によらない心が、身口意の三業を通して、一切の罪業・罪障の種となっている、と言いかえることが出来ましよう。

絶対なるもの、それはたゞ仏知見によるもののみです。それ以外のものは、すべて相対・差別・対立であり、これに執着すれば、時々念々、氣づかない中にも貪・瞋・痴の三毒におかされて、六道の罪業・罪障を積み重ねて行ってしまうのです。

そこで今、相対・差別・対立に着して犯し來った無量深重の罪業・罪障に気付いて、「若し懺悔せんと欲せば」相対・差別・対立の執着から出離すべく、経文に、

端座して実相を思え

とあるように、諸法実相の世界を照す仏

知見、この絶対なる心を思念するほかはありません。

何故ならば、如何に真心を尽して懺悔しようとしても、絶対なる仏知見を仰がない限り、懺悔しようとする心そのものが、既に相対的であり対立的なものであるのですから、懺悔しようとすればするほど、却つて相対・対立の度をますます深めますます強くするという結果になってしまふからです。

絶対なるもの、それは、大は宇宙的存在から、小は細胞・微粒子に至るまで、ありとあらゆるすべてのものに超越しつゝ、しかも、それらのすべてに内在しながら、一切に互具円融しているのです。

仏知見もまたそうです。従つて至心に仏知見を仰ぐ時、その人の心魂の隅々にまで

も、仏知見が侵透し、その田舎無礙の力によって、たとえ如何にかたくなる心のしこりでも、罪業・罪障のかたまりでも、

衆罪は霜露の如し

毎日よく消除す

霜や草露が、太陽の光りにまつて消えてしまふように、解きほぐされて行くのです。

お釈迦さまの御在世当時、人の子を次々に取つて食う、鬼畜の如き婦人がいました然し、ひとたびお釈迦さまに出あい、その広大無邊な仏知見に照されるや、さしも鬼畜の如き心も、たちまち解きほぐされてしまひました。この婦人こそ「仏知見を求める人々を擁護する」と誓つた鬼子母神の、曾つての姿であったのです。

またお釈迦さまの御在世当時、コーサラ国の都に、アンクリマーラーといふ殺人鬼

がいました。彼は百人の人を殺し、その指を切り取つてはカツラを作つていました。然し、ひとたびお釈迦さまに出でたりや、たゞまち、兇悪・猛暴な心も消え、その場で髪を剃り、袈裟をまとつて仏弟子となつています。

仏知見、それが如何に偉大なものであるか、これは、その一例にすぎません。罪障・譴悔・罪障消滅、それは仏知見によつて、はじめて可能となるのです。

以上、要するに、觀音菩薩行法經の前述の経文の中で、最も問題とされるところの、「端座して実相を思え」という、その「実相」とは、観念的な理論の世界ではなく、仏陀の人格と觀智、いわゆる仏知見によって照し出された絶対なる世界のことであり、また、それを「思う」ということは、対象的な立場にあって觀念觀法し、真如实相の理を自己本位に、自分の思考の内でとらえるこいつ、そういうことにはなくしてまさしく仏知見を仰ぎ、これを思想概念、以そ仏知見に自己の生命を全托して、相対・差別・対立の世界より離れ、絶対なる仏知見の世界に入るということなのです。

次に問題とされるところの「衆界は霜露の如し、慧日よく消除す」ということは、相対を超えるのに相対をもつて見るより絶対をもつてする、いわゆる罪障を消滅するのに凡夫の計らいをもつてするよりも、

仏陀の計らい（慈悲と觀智—仏知見）をもつてする方が、如何にたやすく、速かであるかということを、警えをもつて実感的に知らしめると共に、仏知見の世界においては、もはや罪の種子、いわゆる仏知見に

はそれを顛倒妄想の心は悉く、瞬時にも消滅し尽されている、ということを現わしているのです。

然しながら、ここに注意しなければならないことは、絶対なる仏知見の世界に入るこことによって、これまでの顛倒妄想の闇は利那の間に消滅し、今後一切、罪の因果を作らないにしても、過去において犯した罪の業報は、なお一分も漏らさず受けねばならない、ということです。

たとえば、前述のアンクリマーラーは、お釈迦さまの仏知にあうや、利那にして罪を改悔し、その場で仏弟子となりました。その時、アンクリマーラーを逮捕しようとして車隊をひきいて来たハシノク王でさえ、仏弟子となつたばかりのアンクリマーラーの輝くばかり尊い姿に感動し、合掌礼拝し

て、そのまま立ち去ったほどでした。
然し、その後のアンクリマーラーは、街へ托鉢に出ることに、曾つて殺した人々の遺族たちから、報復のよしりをうけ、杖でうたれ、石・瓦を投げつけられました。報復は毎日毎日いたる所で繰り返えされました。然しみどろの中にも、ひたすら仏知見をたゞえながら、報復を償罪として受け、遂に杖本瓦石の中に斃れて行つたのです。

法華經第二十に説かれている常不輕菩薩は、道ゆく人々の姿に仏身を観するほどの仏知に住しながらも、絶え間ない迫害を忍受することによって、魔王の意図を消滅して来世、釈迦を尼ムニヤ成道された、といわれています。

の中に、上行菩薩再誕の自覚を深めつゝ、
迫害こそ罪滅と感謝されているのです。

心仏知見の世界に住することによって
すべての罪の縛縛より解脱し、再び罪の因
果を結ぶことはありません。

この處を即身成仏の中では、名字即の成
仏といい、未来の成仏が決定するのです。

然しそれでもなおかつ、過去に犯した罪
報は身に受け、たとえ生れ代り、死に代り
代を重ねても、これを滅し尽して、はじめ
てお釈迦さまと等しき仏身を成就すること
が出来るのです。

次に日蓮大聖人の滅罪觀について述べる
ことにいたしましょう。

(以下次号)

信仰相談歓迎

一、教義、信仰に関する御質問したい
方は、遠慮なくお申出下さい。本
誌上でお答えいたします。なお誌上
公開にさしつかえる場合は、その
旨御記入下さい。

一、係は日高白象師ですから、左記住
所へお申出下さい。

山梨県身延町波木井山頂

醒悟園 本妙庵内
鷲峰信仰相談室

一、直接、面接して御相談したいの方
は、何時でも遠慮なく右へお越し下
さい。参籠修行も出来ます。
その折は前もって御一報下さい。

北陸・関西・九州

街頭布教紀行

その2

これは真言の總本山高野山擊鼓宣令に統
く高槻市と大阪市の街頭布教篇である

編集部

宝樹寺へ

急行「きたぐに号」が終着大阪駅へ入ったのは午後五時五十五分。折からラッシュに雜踏するホームには、神戸の奥町妙代法尼ほか信徒數名、高槻の中井健氏御夫妻、大阪妙經寺檀徒の宮本龍一氏親子、大阪雲雷寺総代の木谷菊太郎氏御夫妻、奈良立正靈山会の渡本蓮子さん、布施の宝樹寺総代世話人の一行、等々二十数名の方々が、太鼓をうつて出迎えていた。

北陸三県街頭布教の汗とホコリにまみれ、製服も衣もヨレヨレになっていた布教隊は、それでも疲労の色さえみせず、荒武者の如くホームに降り立ち、出迎えの方々と力強い挨拶をかわした。

布教別動隊といつても、メンバーは殆ど驚峰会の者ばかり。既に過去何回かの関西布教で、お互い顔なじみになっていた。な

つかしくもあり、嬉しくもあり、そしてそれにもまして、明日から決行される関西各地の、街頭布教に対するエネルギーが、今にも爆発するかの如く溢れていた。

ひとまず布教隊の、山のような荷物は、タクシーで宝樹寺へ送り、一行は環状線を鶴橋で乗りかえ、近鉄の小阪で下車、擊鼓して宝樹寺へ向った。

山門には住職和田龍遵師をはじめ寺族、世話人一同が、満面微笑をたまながら、合掌して出迎えていた。

その中には、北陸布教には行かなかったけれども、これから別動隊として参加する学三の川島君、高三の神藤君、高二の武内君の顔があった。

「よう、よく来てくれたな、頑張らうぜ」学生たちは、互に肩をたまき、手を握りあつた。

和田龍遵師は大阪布教師会長。別動隊の

学三和田龍昌君は、その長男である。和田君が書いた「我が出家の動機・孝道に生きぬく者」という手記は、本誌六月号と七月号に連載され、好評を博したが、今度の関西布教では、宝樹寺に七月二十五日から二十九日の五日間、そして和歌山布教の終了した八月二日の夜と、あわせて六日間も宿泊することになつており、期せずして宝樹寺は、関西街頭布教シリーズの布教基地となり感があつた。

隊員は、まず本堂で説経唱題。御宝前に北陸三県布教の無事成満を報告感謝し、更に明日より八月二日までの八日間、大阪・高槻・阪南五市・和歌山・高野山と展開される街頭布教の所願達成を心から祈願した。

その後、風呂に入り、身延を出発して以来四日間の、着類を全部洗濯している間、大阪駅からここまで、一緒に来られた出迎えの方々も、それぞれ帰って行かれたが、

神戸の奥可妙代法尼の一行が、置いて行かれた供養の品々心中には、沢山を米・味噌・タマゴ・野菜・トマト・スイカ・桃・そして「救心」という疲労回復剤等の薬までが入っていた。

暑中休暇を返上してまで、連日布教に挺身する学生とはいえ、その身の上を、かくまでも思ってくれる人々の情が、測々として身にしみ入る思いをせずにはおれなかつた。

隊員 病む

その夜十時ごろ、隊員の近藤君と三宅君が腹痛を訴え始めた。早々に就寝せしめ、疲労回復剤や鎮痛剤など注射して手当したが、特に近藤君は、吐気を催し、周期的におそろて来る断末魔のような苦しみに、のたりこった。

昨年夏の関西布教の折にも、炎暑激労の

ため、数名の隊員が、名古屋でも倒れ、大阪でも倒れている。今年もまた、遂に二名倒れた。

連日ギシシリつまつた布教スケジュールから無理とは、百も承知していた。倒れる者が出ないという方が、むしろ不思議なくらいである。

然し、その困難を克服して行く中に、不自惜生命の色説があり、修行即布教、みずからの修行が、そのまま他に対する化導として、自行化他の二法にわたる成果が發揮されて行く。

とはいっても、如何に心は、高邁なる不屈不撓の信念に沸き立ってはいても、肉体の病気には、さすがに勝てない。

現に、油汗を流して、苦しみもだえる近藤君の姿を、まのあたりにすれば、看病する者も、たゞオロオロするばかり。

三宅君の方は、間もなく深い眠りについ

た。然し近藤君の訴える苦痛は、ますますひどくなる一方。とうとう夜半の十二時、和田上人の夫人に案内されて、近所の病院にかつぎこんだ。病名は、極度の疲労から来た急性胃痙攣。

「明日一日中は、静かに休ませた方がよいでしょう」

医者に注意されて病院を出たが、明日も天気が、夜空にきらめく星座を仰ぎながらにじむ涙の中に、

「三宝諸天善神さま、日蓮大聖人さま、布教隊は、かくの如く戦っています。どうか一人一人の隊員を最後までお護り下さい」と、祈らずにおれなかつた。

高野（こうや）の峰に 宗祖の遺跡をたずねて

明れば七月二十六日、この日は関西布教〇第一日として、真言宗の總本山・高野山

に、七百年前、日蓮大聖人が真言秘密の奥儀をきわめるべく遊学された遺跡をたずね更に全山にわたって擊鼓宣令、立正安國の大道を囂子吼するという日程である。

ところが、かねがねこのことについて、日蓮宗布教師会にあっては、

「高野山側に、日蓮宗が抜き打ちに電撃的な殴り込みをしかけた」というように受け取られはしないか」

という懸念をもって、

「事前に連絡をとるべきか、どうか」と種々協議させていた。

といふのは、曾て昭和三十五年の春、創価学会青年行動隊が十数台のバスを連ねて、突如、身延山に乗りつけ、悪口雜言、悪態の限りを尽して、引きあげていったこともあつたからである。

「然し、事前に連絡すれば、高野山当局としても意識しすぎて、却って事が大きくな

りはないか」

「という意見も出、結局、

「挑戦とか殴り込みに行くわけではないし、

大聖人の遺跡を参拝し、あわせて大乗的見

地から、大慈悲をもって真言開会の端を開

きに行くのだから……」

ということで、連絡はとらないまゝ、関

西方の信徒の中にも希望者があれば、布教隊と同行する、ということになっていた

集合は、南海電鉄の難波駅、午前七時三

十分。この日は丁度夏休み中の日曜日のこと、早朝より、さしも広い駅の構内は、家族それで、海へ山へ向う行旅客の、何千、たのは午前九時四十五分。これからケーブ何万という殺人的な人波に埋まり、嬌声・怒号・熱気が渦巻いていた。

その中には、打ちならず布教隊の、太鼓の音に集って来た同行の人々は、尼ヶ崎市の妙隆教会辰巳妙隆法尼の一行十数名をはじめ、大阪妙経寺檀徒の宮本龍一氏親

子、大阪大正講の難波正志氏、奈良立正靈

山会の榎本恵子さん、このほか思いもかけない大阪方面の身延山本願の方々等々、

人数は、みると中に五十数名にふくれ上

った。

信徒は皆タスキをかけ太鼓をもち、凜々

しく布教装備に身を固めていた。その中にには、身延山大学卒業後、布教研修所を卒業した尼ヶ崎の浮穴（うけな）惠勝師の、なつかしい姿も見えた。

難波駅発、午前八時の特急高野山行き電車が、すしすめの客を乗せて、山麓について、車内は、中学生の学校団体、それにつきそつ父兄の団体等々がひしめいており、順番を待つのに、うんざりしてしまい、やっと山頂の駅につき、観光案内所で道順を聞けば、

「駅前から女人堂まで、目下道路が工事中

だから、とても歩かれたものでない。バスで女人堂まで五分間くらい。そこで下車して十分も歩けば、右側にお寺があり、その横を通りすぐ角に池があるので、池に沿って右へ廻れば、南無妙法蓮華經の石の宝塔が建っている」

と、親切に教えられたのに勇気ずいたまではよかったです、バスの順番を待つのに、またひと苦労。やっと女人堂の前で勢揃いした時は、既に十一時をすぎていた。

これより二流の玄題旗を押し立てた五十余名の一行は、擊鼓唱題、足並みをそろえて、堂々の行進を起し、舗装された女人堂の坂を轟々と下って行った。

轟散は高野の峰々、谷々にトウトウとしてこだました。それはすさまじいばかりの音響だった。

曾って日蓮大聖人が、六十一年の生涯をかけて破折してやまなかつた真言亡国の秘

法、その總本山高野の峰に、今、身延山の玄題旗が進み、毒鼓がなり響く。

学生隊も、これにつづく信徒の一人一人にしても、たらぬ緊張と感慨を覚えなき者はなかつた。そしてその感慨は、大聖人の遺跡の前に到つた時、いやが上にも、きわめらざるを得なかつた。

遺跡は、駅前の案内所で教えられた通りの場所にあつた。お題目の宝塔は、巨大な一本の老杉のそばに立っていた。

宝塔の高さは、およそ一丈あまり、正面の碑文には、仰ぐ者を圧するが如き、雄渾なお題目が刻まれており、その右側には、

「日蓮大聖人遊学之遺跡」

左側には、

「大聖人六百五十速忌報恩記念」

と刻まれ、施主の名も台座に、

「大阪市西淀川区海老江・杉山鶴松」

と記されていたが、まさしく想像にも勝

る、堂々たる大宝塔であった。

然し、あたりは夏草のおい繁るにまかせて、詣でる人もなく、花の供えられたあともなく、荒れ放題に荒れ果てていた。

その荒涼寂寥たる風光は、もう何年も、何十年も、誰にもかえりみられず、忘れ去られたものの如くであり、たとえば今日一日の、何千・何万という参拝者・観光客の人々からでさえも、広い高野山中、取り残された唯一つの場所の如くであつた。

一行は、胸のしめつけられるような思い

の中、宝塔に向ひて、心から自我偏一卷を説誦し、報恩鈔の一節、

日蓮が慈悲賦大をれば、

南無妙法蓮華経は

万年のほか未来までも

流布すべし

と奉唱。擊鼓唱題の後、暫し休憩したが、誰いうともなく、全員無言のまゝ、せせせ

と附近の清掃を始めた。雜草をぬき、宝塔を洗い、そして花を供えた。

何とかして、この靈跡は靈跡らしく復興せねばならない。

誰しも、そう思ったことだろう。そしてその願いをこめて、今日一日の清掃に真心をこめたのである。たとえ供えた花は、明日にかれ、数日のうちに雑草も、もとの如くおおい茂らうとも……。

靈跡の由来

さて、清掃後、この附近で昼食中、日高主任が学三川島君をつれて、靈跡を管理している真言宗の寺院をたずねて行つた。

そこは、靈跡の裏山を越えた、深い谷間にある親王院といふお寺であった。住職は高野山大学教授中川全教師。寂靜院を兼務していた。寂靜院といふのは、大聖人の靈跡の直ぐ裏手に、門だけ残して焼失した寺

院。

つまり大聖人の靈跡は、寂靜院の所有地であるため、寂靜院を兼務している親王院住職中川師が管理しているというわけである。

日高主任が聞いた中川教授の話によれば、昭和五年、中川教授の師匠の代、日本佛教界各宗合同の声明（しようみよう）講習会が高野山で開かれた。この時、天台宗の比叡山よりも声明師が来、日蓮宗では身延山から、下里是察師ほか一名が参加した。この講習会中のこと、下里師から高野山当局に灼して、「日蓮宗では、日蓮大聖人が真言の祕法を修学されたため、高野山に遊学されたと伝えられているが、高野山には、そういう記録は残っていないか。若しこれが、事実記録としてあるならば、日蓮宗としても、その遺跡を顕彰したい」

「五ヶ坊寂靜院」という古い寺院があった。五ヶ坊というのは、妙法蓮華經の五字をつけて、妙智坊・法智坊・達智坊・華智坊・經智坊と称していたものである。そこで、「若し、日蓮聖人が高野山に遊学されたのが、事実であるとするならば、おそらく五ヶ坊寂靜院に止宿されたことであろう」と返答した。なお寂靜院には、承久の乱（承久の乱といえは、承久三年（一二二一）北条幕府が時の三上皇（後鳥羽上皇、土御門上皇、順徳上皇）を隠蔽に、土佐に流配された土御門上皇）として佐渡に流配した國家未嘗有の大下剋上事件である。

大聖人は、その翌年に御出生された。そ

して後年、出家された動機の中には、この下剋上事件に対する疑惑を、解決せんとする意欲が沸っていた。そして生涯、

「天に二日なく、地に二王なし」

という主張をつらぬき、世間・出世間に亘って、秩序の正統を正して行かれたのである。

下里是察師は、
「大聖人遊宇の遺跡は、五ヶ所の名称、土

御門上皇の御追脅からしても、きっと寂靜院に相違ない」

と確信した。そしてどの調査を、身延山に報告することによって、高野山内における大聖人蓋跡復興の気運が、にわかに高まつて行つた。

関西日蓮宗信者は決起した。有志によつて寂靜院の門前広場に、二間四面の常唱堂も建てられ、七面山修行者によつて、日蓮

大聖人の御尊像が奉納された。

そして昭和六年、千数百名の日蓮宗信徒が、高野山に集結し、空前ともいえる盛大な落慶大法要を厳修。

このため、その日は、さすがに真言の總本山も、法華一乘の靈山と化したかの如くであった。

然るに、惜しくも昭和十五年、不慮の失火のため、常唱堂は全焼した。幸い御尊像は火中に運び出されて難をまぬがれ、現在、親王院に安置されているという。

最後に中川教授は、

「五ヶ所寂靜院の再建と、日蓮聖人の靈跡復興は、何とかして一日も早く実現したい」と願つて努力して來たが、折角集めた資金も物価騰貴のため、手のほどこしよりもなくなっている。何時再建されるか見通しもつかないが、再建出来れば、親王院におあ

座申上げたいと思つてゐる」

と、言われたことであつたといふ。

高野山擊鼓宣令

さて日高主任と川島君が、親王院より帰つて来るや、待機していた一行は、直ちに高野山の町に向つて行進を開始した。目的地は、弘法大師の遺骸を祭る奥之院御廟所。そこを終点にして、一本道の町を往復するのである。

町は意外に大きかった。寺院や商店が軒並みにつづき、観光客は街にあふれ、夏休みを利用した林間学校の生徒たちが、一同また一団、学校ごとに教師に引率されて、往来していた。

時刻は、正午をやゝすぎた日中のこと、て、町中は最もにぎわう、さ中であった。そこへ、墨染の衣に手甲脚絆、身延山の白鉢巻も漸々しく、身延山と身延山大学高校

の二流の玄臨旗を押し立てた。学生布教隊につゞく信徒の一団五十数名が、昭和六年以来、絶えてなかつた舉教をとゞらかし、足並みもそろえて行進すれば、さすがに一散市街より遙かに隔絶した山頂の宗教都市しかも他宗の総本山の門前町だけに、町中あげて極目しない者とてなく、中には宗派違いの違和感から、奇異な目をして眺めてゐる者も少くはなかつた。

教義は、それらの人々に對して、漏れなく配布されて行つた。教義には、

一、人間礼拝に徹することこそ
二、信仰実践の座地である

一、祈りなき平和はありえない
敵をもいつくしむ心を探ねよ

永遠へとわの光はその祈りより生ず
と記されていた。

やがて一行は、奥之院の参道にさしかつた。引きも切らない参拜客は、自然、道

を左右に開いた。

参道は、苔むす巨大な杉並木の、ウツン
ウたる中を延々とつづき、左右には全国信
徒の大小の墓地が、すき間もなく立ち並ん
でいた。

その中には、江戸時代の諸大名のお墓が
死後にも、庶民を威圧するが如く、いくつ
も点散していた。それらは、高さ丈余もあ
るかと思われる、巨大な五輪塔だった。

一行は奥之院拝殿前に到り、ここで自我
傳一巻を読誦し、
汝、早く信仰の寸心を改めて
速かに実乗の一善に帰せよ
然らば三界はみな仏國なり

仏國それ養えんや

十方は悉く宝土なり

宝土なんぞやぶれんや

国に痕跡なく土に破壊なくんば
身はこれ安全にして

心はこれ禅定ならん
この詞、この言
信すべく もがむべし

声は「弘法大師の心魂に敬せよ」とばかり
拝顔一杯に響き渡った。

これより帰途についたが、途中参道入口
の、茶店にあふれる参拝者に対して、布教
第一声を放った。

第二声は町の中央、高野山大学門前の十
字街頭、ここでは学生隊員が入替り立ち替
り、マイクをとって立正世界平和を獅子吼
また配布している教義を手にしながら、そ
の説明を加えた。

「世の中に、平和を願わない者はない。ま
た平和を説く者も少くはない。今や世界中
の人々は、原水爆の脅威の中、隨時隨所に
平和の無いを開いている。

然し、如何に平和を論じ、平和を協議しても、実践されなければ、平和は実現しない。難しいのは、論ずることよりも、むしろ行うことである。

然し、如何に素晴らしい平和の機構を作り上げても、畢竟、平和は人間の心の中より始まる。人間の心が乱るれば、折角の機構も何の役にも立たない。

すべての人々の心を平和に導き、しかも一部の者のみでなく、すべての人々が参加し、実践出来る平和の道、それは三千年来、説き伝えられて来た大乘の菩薩道、別ち、全ての人々を敬い、全ての人々に対して合掌礼拝するという人間礼拝のほかはない。

平和の道、それは人間礼拝に始まり、人間礼拝に終わまる。

高野山も信仰の山であるが、まことに信仰実践の極地は、人間礼拝に徹することである。

身延山学生布教隊は、休みを返上して、人間礼拝運動を全国的に展開している。階級の如何をとわず、宗教の如何をとわず、人種の如何、貧富の如何をもとわず、すべての人々を、しかもおのれに敵対する人々をも敬い、合掌礼拝出来る人こそ、眞の平和者である。

平和者よ出でよ。そしてこの人間礼拝の実践を隣人にもすゝめよ。日本一國が人間礼拝の國となつた時、米ソ両陣営はもとより、世界の人々は、日本國を本として、恒久平和の道に安んずることが出来るであろう

街頭の御子吼は、更につづいた。十字街頭にあふれんばかりの人々は、みじろぎもせず、熱心に聞き入っていた。その中には高野山大学の学生数名の姿もまぢっていた。皮肉なことに、布教隊の婢取ニ田町角の

広示板には、原水禁委員の主催した平和集

ことに、アーケードの中央で一発を放った。

会のピラがはられ、そはの電柱には、高野山の町にさえも、そういう劇場があるのか、山門に帰りついでいた。朝五時起床以来、延々十六時間、縄の如く

ストリップのあくどいピラがはられていた。朝五時起床以来、延々十六時間、縄の如く

布教が修了した時、遇然の一斉か、済然として驟雨が襲つた。人々は軒下へ駆け込んだ。布教隊もバス待合所へ避難し、こゝからバスで駆へ向つた。

降り出した雨は、容易にやみそうもなかつた。雨にけむる高野の峰を後に、難波駅についた時は、日も落ちていた。

信徒の方々と労をねきらい、別れを惜んで、布施の小阪駅に着いた時は、既に八時を廻っていた。

然し、駅前のアーチ商店街は、明々

とネオンに輝き、人の通りも少くはない。

忘れ去られ行く
真田山陸軍墓地

折角の機会である。布教隊は、商店街へ太鼓をうち込んだ。予定されない突発の布教であつたが、効果に変りはない。ついで

このため、宝樹寺へは随分廻り道をし、や、腰も立てず、口もきげず、たゞ目ばかり血走つたようにギラギラしていた。

然し、残念ながら元気になつた姿を見た時、疲れも忘れて、思わず涙のにじむ喜びの中、はじめて、「よかったですなあ」という言葉が出た。

華鼓行進。午後は南区中寺町の雲龍寺で日

王寺区宰相山町の真田山公園陸軍墓地へ向

高主任の講演と、大阪日蓮宗寺院青年僧で

こた。

結成している、いわゆる大阪日育との座談会、が予定されていた。

昨夜来、宝樹寺での手厚い接待に疲労回復した布教隊は、全員勇氣百倍、定刻の午前八時三十分、環状線の鶴橋駅に集合。

既に駅の構内には、大阪日蓮門下連合団の团长南日常師御夫妻をはじめ、幹部の貴僧寺總代勝見富士太郎氏ほか团员の方々、大阪大正講の富岡伊三郎氏御夫妻に難波正志氏、立正靈山会より木谷菊太郎氏に榎本蓮子さん。豊中市から七十七才の身延山本願人間瀬和三郎氏。妙経寺檀徒宮本龍一氏の奥さんは中学一年のお嬢さんをつれ、長岡利一氏は八つになる倫代ちゃんをつれ、総勢およそ五十余名。

午前九時、行動発始。富岡氏の案内で、鶴橋駅前より商店街をめぐりつゝ、まず天

真田幸村が陣取った跡である所から、その名がつき、戦時中までは大阪第四師団の陸軍墓地となり、また桜の名所でもあった所である。

然し終戦直後、管理人が戦犯としてあげられ、物資不足の折から、心なき人々のため、桜の名木は新として盜伐され、今はその面影もなく、また墓地そのものも、歳月と共に市民に忘れ去られ、殆ど諂ひでる人もないという。

実は布教隊としても、最初の予定としては、参拝どころか、大阪につくまでは、その存在すら知る由もなかつた。

ところが七月二十五日、北陸三県の布教団をすませて大阪に入り、布施の宝樹寺についた夜、こゝで待機していた大正講の富岡

・難波の両氏より、真田山陸軍墓地に關する詳しい話をして聞いて義憤を感じ、更に、

「この陸軍墓地は、大阪出身者ばかりの英靈が、祭られているのにもかゝわらず、今では、殆ど市民に忘れられ、日蓮宗の人々にすら余り知られていない。

國のため犠牲になつた英靈をないがしろにして、郷土の發展もなければ、國家の興隆もないはずである。

何とかして、この陸軍墓地を世に顕彰したい、と願つてはいても、個々の力では、今まで、どうすることも出来なかつた。幸い身延山布教隊の方々が、大阪城へ向つて行進される。陸軍墓地は、その途中にある。

どうか身延山布教隊に立ち寄つて回向して頂き、広く世の人々に、この現実を訴えてもらいたい」

と懇請されたことによる。義憤を感じた

というのね、

「真田山陸軍墓地は一八九〇〇坪、こゝに建てられているお墓は、日清・日露の戦役以来五六〇〇柱。然し、その八倍以上もある大東亜戦争の英靈四六五二四柱は、引き取る人もなく、お墓も建てられず、納骨堂の中に眠っているが、今では、まるで倉庫の荷物のようになつてしまつてゐる。

それといふも、土地は大阪財務局、管理は大阪市、法要は大阪府の福世課と分かれているため、統制を欠くうらみもあるが、わずかに本門仏立宗・清風寺の信徒が、毎月一回十五日に、自發的に清掃奉仕し、供養しているにすぎない」

と聞いたからである。

今次大戦における四六五二四柱といひ遺骨の、引き取り手もないということは、おそらくその遺族までも、戦災で全滅したか行方不明になつたためでもあろう。痛まし

い限りというほかはない。

然しそれにしても、同じ大阪出身の英靈でありながら、これほど盛大な遺骨が、市民にも忘れ去られようとしているのは、一体、何としたことだろう。

誰しも、戦争の慘異、残酷さは、片時も早く忘れ去りたいものであるにしても、然し、尊くも痛しい、これら戦争犠牲者の靈を忘れてはならない。

これを忘れたまゝ平和になれて来ると、平和そのものが、やがて戦争の母胎となつて来る恐れがある。

午前十時、真田山公園についてみれば、公園全体が陸軍墓地。同じ劍形の小さなお墓が、整然として一八九〇〇坪の境内一面に、所せましとばかり列び立ち、その中央に、大きな納骨堂が建っていた。

この納骨堂は、戦後、大阪仏教連合会によって、建てられたものであるが、はやく

も外側の土壁は、はげ落ちていた。

お堂の内では、管理人や大正講の人々によつて、法要の準備が進められ、中央祭壇の御厨子は開かれて、常時かゝげられてゐる大マンダラ御本尊の前には、灯明・線香・御供物もそえられ、土間も水を打つて清掃されていた。

やがて日高主任導師のもと、「四六五二四柱の英靈よ、安かれ」

と歎詞、莊嚴なる追善法要をいとなみ、唱題中、薄暗い堂内の、遺骨の安置されている祭壇の下を、行堂して廻つたが、祭壇とは名ばかりの、それは棚であり、棚は高い天井まで、十三段に仕切られ、そこには白布につゝまれた遺骨が、ぎっしり列べられていた。

これら供養をうけることすら稀な英靈の

事実を、まのあたりにすれば、今さらのように戦争の痛ましさ、空しさに胸もつまり法要後、堂外に出て、それより更に、広い墓地の隅々までも擊鼓行進回向して、そのまま大阪城へと向ったのであるが、さすがに後妻の引かれる思いを禁ずることは出来なかつた。

者の中には、早くから高麗市の中井難氏をはじめ、十数名の信徒が待機していたが、その中には、本誌七月号に「悲願の一灯」と題して紹介された大阪明淨学院女子高校の老教師、今年八十六才になる赤坂日幸先生の姿があつた。

大阪城外の教育塔

真田山公園より宰相山町を通って上本町

二丁目に出て、これより電車道路にそって国立大阪病院・中央体育館・教育会館・警察会館・NHK放送局・農林会館の前を経、警察本部前の交叉点を渡って、大手前公園に入り、大阪城を仰ぐ外堀のそばの、イチヨウ並木に囲まれた教育塔前に到着したのは、予定時間を一時間もすぎた午前十一時すぎだった。

教育塔といふのは、大阪府下の教育関係

既報の如く、赤坂先生は、高峰会の布教資金として、二十万円もの大金を寄進された方である。それにもかゝわらず高峰会の学生とは、これまでに写真以外、いまだ誰とも一面識すらなかつた。

はじめで接する赤坂先生の姿、この老教師に出迎えられた布教隊十三の感激は、到底、言葉に言い尽されるものではなかつた。

教育塔での慰靈法要後、さっそく布教隊は、赤坂先生を囲んで記念写真をとり、

これより共々に、退手門・桜門を経て、大阪城天守閣へ向った。

起し、更に、「永遠不滅なるものは一体何であるか」と提案、観光客の耳をそばたゞせた。

大阪城天守閣

雲雷寺へ

天守閣の下に到着した一行は、天守閣の棟上、或は前庭の茶店に休憩している観光客に向ってさっそく街頭説法を展開した。日は中天であり、ギラギラする真夏の直射日光は、容赦なく照りつけ、手にするマ

イクは、水を打つようになれていた。

学生隊員は、午前中参拝した真田山陸軍墓地における、引き取り手もない四六五二四柱の遺骨のあることを紹介し、

「二度と戦争がないように」

「一日も早く平和社会が実現するようだ」

と、平和の道を訴え、或は大阪城天守閣を指さしては、豊臣秀吉が一代の権勢を誇った大阪城も、今は単なる観光施設にすぎなくなっている所から、人生の無常を説き

布教終了後、天守閣前の茶店で、南師の供養される昼食をすませ、これより雲雷寺総代勝見氏の先導で、南区中寺町の雲雷寺へ向った。

午後の日さしは焼けつくよう、車の往来はなげしく、行進は難辛をきわめた。その中に赤阪先生は、八十六才の高令にもかゝわらず、

「タクシーで行かれては……」

と、すすめるのも断り、隊列の最後尾を根気よく行進された。学生隊員の一人が、始終そばに、つきそっていた。

汗とホコリにまみれて雲雷寺についたのは、午後の三時。鉄筋の本堂で小憩をとり、

間もなく日高主任の講演にうつった。

その内容は、日蓮大聖人の本尊觀に一貫し、

この時、地涌千界出現して、

本門の教主釈尊の脇士となり、

一輪浮提第一の本尊、

この間に立つべし

といふ、観心本尊妙の一節にもとづき、

これを次の如く普渡した。その概要は、

「世界第一」の本尊である久遠の本仏釈尊とは、靈山虚空会において、本門の法華經を説法されているインドアーリヤン人種ゴータマ仏陀釈尊そのものゝことである。

この人間釈尊を離れて、別に久遠の本仏があるわけでもなく、また釈尊の心異に、

久遠本仏をたずねるのもない。もとより釈尊は、本仏を指さす指でもない。

本門の法華經説法の座における人間釈尊

そのものを、久遠の本仏と仰ぐ本尊觀、かくの如き本尊の見方こそ、法滅度後二千二百二十余年が間、未曾有の大本尊觀であり、またかくの如き本尊觀をもつ者こそ、法華經では、本化地涌の菩薩といふのである。

地涌の菩薩とは、単に形而上の偶像ではなく。かくの如き本尊觀をもつ我々人間のことであり、我々みずからが、地涌千界の菩薩として、本仏釈尊の脇士となり、この未會有の本尊を中心とした法華經信仰を、まず大乘相応の日本一國から宣布するのである。本尊妙前述の一節は、まさしく、この意にほかならない

ということだった。

大阪日青との座談会

講演終了後、ひとまず休憩となり、この間、雲雷寺住職伊丹靈瑞師をはじめ一山あげての歓待をうける中、早々に入浴、次い

で夕食の供養にあすかり、夕刻七時より新書院大広間において、大阪日蓮宗青年会三十余名の、青年僧との座談会に入った。

座長は大阪日青会長伊丹師。座談は前後三時間にわたり、

一、今後における宗門青年運動の在り方
一、在家青年会の結成と、その運営方法等々について、活発な意見が交換され、

予定の終了時刻は再度も延期されたが、最後後に発言した浪速区音明寺有吉正明師（昭和三十三年身延大学卒）の言葉は、あまりにも感動的であり、印象的だった。

暇のたびに、故郷へも帰らず、自費自弁で、各地の街頭布教に出かけている。大阪の地には、昨年の夏も水、今年もこゝにこうして来ている。この実践行動には全く敬服のほかはない。

然し宗門青年は、身延山から毎年繰り出される学生布教隊を、たゞ迎えるだけであってはすまない。

布教隊に対し、双手をあげて歓迎するほどであるならば、百尺竿頭、歩を更に一步進めて、我々地方青年もまた、少くから布教隊の如く、寺は忙しくとも、放て日數をさき、墨染の衣をまとい、手甲・脚絆をつけ、太鼓を打って、身延へ身延山へ、祖廟へ祖廟と歩くべきではあるまいか。

そしてこの運動が、宗門の全国的運動と

「我々青年は、現実を厳しくみつめつゝ、しかも理想を見失わず、あくなき追求をつけて行く。本日の座談討議も、そのあらわれである。

本日は身延山学生布教隊の来阪を迎えての座談会であったが、身延の学生は、休

となり、全国各地より祖廟身延へと、駕籠行進が展開されるようになるならば、その総力は、身延山から全国地方への駕籠布教と

あいまって、宗門は愚か、日本宗教界全体をも動かす、恐るべき力となつて行くだろう」

座談会が解散になつたのは夜十時。布教隊は、南部の斡旋されたタクシードに分乗、ネオンに輝く夜の大坂を、一路、布施の宝樹寺へ向つた。

高 機 市

明ければ七月二十八日、の日は関西布教の三日目、身内を出てから、はや一週間、大阪府三島宗務所主催による高槻市の街頭布教である。

高槻市は、大阪と京都の中間にあり、身延山よりは、北陸布教の本隊を引率帰山された岩間布教師長が、午後より講演にかけつけることになつていた。

布教隊は、大阪布教師長和田龍溪師を

陣頭に、朝のラッショをさけて、早目に宝樹寺を出発。国電高麗駅には、集合時刻より一時間も早く到着。さっそく駅前広場に陣取り、通勤者に向つて布教を展開。

この間、宗務所長山口文恭師をはじめ、天台笠に手甲脚絆をつけた管内寺院各聖、ならびに檀信徒が続々とつめかけ、みると中で駅前広場は、玄旗旗と人波に埋まつた。

その中には、タスキをかけた中川育子ちゃん（六才）と要裕らやん（五才）といふ可愛い姉弟が、お母さんの信子さんにつれられて喜々としていた。聞けば、大阪府下の吹田市から駆けつけたのだ、という。何時の間にか中井健氏が、十六ミリで盛んに撮影を始めていた。

いよいよ定刻の午前九時、玄旗旗を陣頭に、堂々の大行進が起つた。高槻は創価学会員も少くないといわれている。そこで、

まず駅前の芥川アーケード商店街を、擊鼓にゆすぶり、これより学会員の集合していきる地区的、路地から路地を駆なく準鼓宣令。延々三百をこゆる法鼓は、さながら学会の息の根をとめるかの如くであった。

午前十時、洋裁店を開いている中井氏の本宅の前で暫時休憩。この間も町内に向うて、布教は休みなく続けられ、更に行進は市役所前から新京町のアーケード商店街へと進み、京阪高槻駅前広場では、火を吹く

ような獅子吼が展開された。

火を吹くような獅子吼、それは決して過言ではなかった。駅の構内にあふれる乗客に対した布教隊をはじめ行進の一一行は、日かけもない広場、観衆の見守る中に、腰をおろすことは愚か、隊列を崩して喉をうるぼすことも出来ず、日射病で倒れる若も出るかと氣づかわるばかり自もくらむようだ、直射日光にさらされていた。

喉はカラカラにかわき、汗は滝の如く流れだ。小脇にかかえた太鼓でさえも、流れの汗にぬれていた。

若い学生布教隊の者ならば、まだよいとしても、行進に参加した人々の中には、老いた人々も少くはない。それら人々の忍苦を思えば思うほど、学生の獅子吼は、現地寺院檀信徒の熱誠にこたえて、管内宗風を宣揚すべく、舌頭まさに火をふくが如くあったのである。

この時、アイモを廻していた中井氏が、こみあげる感動のまゝ一句を綴った。

流れ落つ汗が太鼓をぬらしゆく

布教の嚴しさ、まのあたり見て

行進は更につゞき、市内大手町の本行寺（宗務所）に到着したのは正十二時。汗だくだくなつた管内寺院各里と力をねぎらへ、昼食の供養をうけている時、身延より岩間布教部長が到着。学生隊は日に焼けた

顔をほころばしながら、親にでも出あったた
ようだ。とつと沸いた。

さて午後一時より、立錐の余地もない本
行寺本堂で、立正安國大講演会を開催。山
口所長の挨拶あって日高主任、和田布教師
会長、岩間布教部長の順に出講。街頭布教
につづく多大なる感銘を与えた。
講演会終了は午後五時、これより山口所
長と中井氏の接待で晩餐座談会。夜八時、
をあとに宝樹寺へ向った。

此の布教終了の後、たとえ学会の反動が起
ったとしても、じとよりもむ寺院は、眞然
として受けて立つ手はずを取りきめて、意
気まさに天をつく概があった。

主催は大阪日蓮宗布教師会。午前八時、
集合場所となっている天王寺区勝山通りの
日遼門下連合団事務所では、管内寺院各里
をはじめ大阪日肯の青年僧も、潔々しく手
甲・脚絆に身を固め、前庭にあふれる檀信
徒は、早くも異様な緊張と興奮につゝまれ
ていた。

午前八時三十分、学会折伏行進に関する
細部の諸注意が、和田布教師会長よりあり、
七月二十九日は、大阪市生野区全域にわ
たる街頭布教。こゝは市中でも、創価学会
と共に、最も根強く馳騒している地区。
従って、この日の布教方針は、真っ向に
学会折伏をとりあげ、生野区学会を完結
なきまでに破折することに指向され、また
學會折伏をとりあげ、生野区学会を完結
なきまでに破折することに指向され、また

午前八時三十分、学会折伏行進に関する
細部の諸注意が、和田布教師会長よりあり、
いよいよ定刻の九時、総勢六百をこゆる大
行進は、生野区法見寺の高木龍修師誘導の
もと、二流の玄題旗、現地寺院、身延山布
教隊、現地檀信徒の順に、堂々法鼓をとど
ろかして繰り出された。

擊鼓の隊列は、延々数百メートルに及ん

だ。さうそく身延山布教隊員は、隊列の外側、五十メートル間隔に分散。太鼓の調整に当った。外側の隊員は、隊列陣頭指揮者の南無と大きく打ちおろす太鼓のバチの一閃にもわせ、隊列の者は、外側者のその一閃にあわせた。

やがて行進は、桃谷駅前より桃谷商店アーケード街に入った。法鼓は外側者の、一閃また一閃にあわせて、一糸も乱れず、文字通りアーケード街をゆすぶり、地軸をゆるがすばかり。

若し、この行進中、たとえ太鼓の音一つ

でも乱れたならば、折角の大行進も、その威観を減じたことだろう。

さて街頭説法、学会折伏の第一声は、猫間川通り映画館の前。日高主任の、悽絶きわまる学会破折の獅子吼は、勢いあまって予定時刻を二十分も超過。

市街の人々には、今さらの如く日蓮聖人

宣令。八坂神社での小憩中にも、学生の街頭説法は展開され、次いで舍利町から田島町二丁目の通りに至った。

田島町二丁目、この通りは数軒の日蓮宗信者の家を除けば、右も左も軒なみに全部創価学会。支部長の家も、この通りにあった。

布教隊二流の玄団旗は、学会支部長の門前に立てられた。六百を超ゆる行進隊列はこの通りの左右に分れ、通りを埋めて端から端へ、一列縱隊に布陣した。そして二台のマイクを通して、完膚なきまでに学会を破折する獅子吼が始まった。

大阪日育の青年布教師をはじめ身延の学

生隊員は、次々に正義の怒りをぶつけた。も本仏教尊は、たとえ親が、十人の子供最後に日高主任がマイクをつかんだ。

それは、まさしく狮子王の如く、或は慈父の、我が子の非行を嘆き、いさめ、そして深く祈るが如くであった。

結びの言葉は、開經偈の一節であった。

「若しは信、若しは誇、共に仏道を成す、
とは、朝夕に唱え親んでいたる開經偈の中の
仏陀の言葉である。

信ずるとは、本仏教尊を信することであり、誇ずるとは、本仏教尊を誇（そし）ることである。信ずるは日蓮宗、誇しるは創価学会。そして学会が、日蓮宗を仇敵の如く敵視して、ことあるごとに誹謗・ザン誇い。天地の間、因果の鉄則は厳然としている。然し、学会が犯した誹法の大罪は消え難い。あわれなるかな創価学会。その一人一人は、懺悔しない限り、無間地獄の責めを

然し、誹るも誇らるるも共に仏子、本仏教尊の愛子であることに変りはない。しか

の中、一人でも放蕩無頼に走る子があれば他の九人の子供をいつくしむより以上に、その一人の子供が、一日も早く本心に帰るよう、と心をくだくが如く、学会の顛倒誹法を悲しんで、心遂醒悟の速かならんことを念じ続けられている。

日蓮宗は、かゝる本仏教尊を本尊とし、本尊の心を心とするが故に、如何に学会より、心なき誹謗をうけようとも、にくんだり、対抗したりするどころか、むしろ彼等の無知顛倒をあわれみて、本仏教尊と共に彼等の上に、更に深い祈りを捧げる。

まぬがれることは出来ない。
この嚴然たる因果の理を思ひ時、たとえ

学会のすべての人々が、無間地獄の底に沈むとも、なを一切衆生を悉く、本仏釈尊のみと信する日蓮宗は、本仏釈尊が、

〔我れ一人のみ能く救護をなす〕

と言われた誓願、更には、

〔つねに自らこの念をなす、何をもってか衆生をして無上道に入り、速かに仏身を成就することを得せしめん〕

と慈愍される毎日の大悲願を思うが故に

そしてまた開經偈の、

〔若しは信、若しは謗、共に仏道を成す〕

という怨親平等の金言を体するが故に、みずから本仏釈尊の勅使、本化地涌の菩薩として、落ち行く学会の人々と共に、敢てみずから無間地獄の底まで降りて行き、その一人一人をも靈山淨土へ導いて行くであろう。

そして学会最後の一人までも、本仏釈尊の靈山淨土へ攝取引入しない限り、日蓮宗

の人々もまた、最後の一人となるまで、みずから淨土の楽しみは取らないであろう。

念佛門における法藏菩薩でさえも、弥陀

四十八願の中では、

〔一切衆生が救濟されない限り、みずから正覚をとらじ〕

と誓願されている。ましていわんや我々は法華經の行者、日蓮大聖人の直弟子、

直檀である。

我が子の苦惱を外に、独り楽しむ親はない。子の悲しみは親の悲しみ。子が地獄へ落つるならば親もまた、地獄の底までついで行く。

日蓮宗の者もまた、まさにかくの如く、心は本仏の仏界に居しつゝも、身はたとえ地獄苦惱の底までも、遣使還告の仏勅の使として、衆生救濟の任を遂行して行くであろう。

弘安五年十月、日蓮大聖人は御入滅に際

して、

「たとい、いざくて死に候とも、九ヶ年の間、心安く法華經を説誦し奉り候山なれば、墓をば身延山に立てさせ給え。未來際までも、心は身延山に住むべく候」

「日蓮が弟子檀那等は、此の山を本として参るべし。これ則ち靈山の契りなり」と御遺言された。爾来、大聖人の魂魄は白雲深き身延山中より、末法万年尽未来際嚴然として全人類の行くすえを見護つておられる。

然るに今、世界全体をみれば、本仏祇尊を本尊として法華經を信する者は、まことに大地の土に対した爪上の土。誇する者は多く、信じない者は更に多く、知らない者に至っては、大地の上の土の如くである。されば、末法における正法の弘通は、難中の難。然し、その道は如何に遠く、けわしくとも、また如何に譖謗・サン謗の声は

卷間にみちあふれ、如何に抵抗・迫害は続発しようとも、蓋し、仏陀の悲願、衆生救済の大慈悲心は、久遠劫來、不滅、不変、微動だにしていない。

我々日蓮宗は、この悲願、この大慈悲心を体するが故に、忍辱の衣をまとい、何時かは、必ず何時の世にかは、すべての人々が、顛倒の醉いよりさめて、仏知見の道に入ることを、たゞひたすらに信じつゝ、なおも全世界に向って鼙鼓宣令して行く」

日高主任の祈るが如き狮子吼は、猪間川通りの空をおゝい、地にもしみ通つて行った。日蓮宗行進団の人々も、町内の創価学会の人々も、そして一般通行人の人々でさえも、あたかも釘づけされたように、身じろぎもせず、頭をたれ、耳を傾けて、聴き入つていた。

そこには最早、宗派教団の対立もなけれ

ば、敵・味方の差別もなかった。そしてすべての人々の心の中には、怨恨を乗りこえた平等の光が、太陽の如く輝き、法雨は慈雨の如く潤って行った。

さて行進団は、再び数百の絆鼓をとどろかし、これより田島町三丁目、四丁目、そして百濟町商店街と行進。東住吉区染津町の広宣寺に到着したのは正十二時。

この尚、法見寺高木師のひきいるボーイスクウトが、制服・制帽で交通整理に協力していた姿が人目を引いていたが、なお行進隊列の中には、尼ヶ崎から駆けつけた妙隆教会の一行をはじめ、八十六才の赤阪日孝先生や、小学校六年生になる宮本龍一氏の坊ちゃんの姿もあり、そして身延山特別大本願人岡本組会長岡本宗治氏・鈴夫婦の姿も見え、特に同夫人が、腹痛のため二日前から、一食も食べずにゐるにもかゝわらず、大正講中の陣頭に登場しておられたこと等

には、感動しない者とてなかつた。

さて広宣寺では小憩一時間。その間、昼食。そして午後一時より大阪宗務所長奥田学進師導師のもと布教師会・修法師会が総出仕して、嚴嵩なる戦争犠牲者慰靈法要、ならびに立正世界平和祈願式典を斎修。

つゞいて午後二時より岩間布教部長の大講演あり、大いなる感動の中、午後五時終了。

布教隊及び管内寺院檀信徒の有志は、貸切バスで布施の宝樹寺へ帰り、午後六時三十分より同寺書院において、折から身延より、岩間部長と入れ替りに駆けつけられた長谷川教務部長を中心に「身延山布教隊を囲む夕べ」を開催。

まず長谷川部長の挨拶、和田布教師会長南連合團長の所感発表があり、さめやらぬ街頭布教の余音の中、つゞいてこの日の布教成果について、歌謡の一時をすごしたが

この時、現地側より、

「来年の夏休みも、是非大阪へ布教に来て
もらいたい。この時、大阪では西成区を中
心に、スラム街の釜ヶ崎街頭布教を決行す
る」

といふ声が、キユウ然として起り、志氣
ますます奮い立たずにおれなかつた。

反響の一例

次に、この日の反響の一斑を紹介してお
こう。

今年も身延山大荒行堂は、例年の如く、
十一月一日より始まつたが、その前日の十
月三十一日、第三行に入行される大阪生野
区の法見寺住職高木龍修師を見送つて、同
寺の総代護持会代表数名の方々が、身延の
玉屋旅館に一泊した。その夜、鷲峰会学生
が招待され、夏の大坂街頭布教慰労懇親の
宴が催された。

その席上、高木師をはじめ總代護持会代

表の方々より、大阪布教後の反響の一斑を
聞くことが出来た。今それを縕約すれば、

「生野区の船岡通りは、創価学会の集居
軒数はおよそ二百数十世帯。この中、日蓮
宗の家はわずかに數軒。通りに面して学会
支部長の家があり、その隣りが法見寺の篤
信者明松節子さんの家」

「そして身延山街頭布教が展開されるまで
は、毎週一回、支部長の家で学会員の集会
があり、さしも広い附近の通りは、数十台
の自転車・カブ・オートバイで埋められ、
夜ともなれば、支部長の家の便所では間に
あわず、通りのいたる所で立小便をし、明
松さんの家の垣根はもとより、玄関さきに
も、平気で垂れ流すことは、毎回の如くで
ないほどだった」

「ところが七月二十九日、身延山布教隊が猫間川通りで、鞆鼓・獅子吼してからといふものは、孤つきかオコリでも落ちたようだ。突然、学会の集会が、全く途絶えてしまった。」

「八月に入つても、集会の開かれた気配すらなく、十月になつて、ようやく十二・三名の者が、ひっそりと集まつているような状態である。」

「これによつても、身延山布教隊の学会に与えた影響が、如何に素晴らしいものであつたかと想像されようが、これはその一斑にすぎない。堺市をはじめ阪南五市から和歌山にかけて、今回実施された身延山布教の成果が、如何に顕著であったかという、多くの情報が次々にもたらされている。」

これは、とりもなおさず学会の人々にも大慈悲心をもつて教えれば、是非・善惡をわきまえる理性は失われていない、といいうことであつた。

（以下次号へ）
証拠であり、我々は、より一層、布教に専念せねばならない、ということが痛感された

編 集 佐 記

鷺峰

十一月号

☆十一月ともなれば、迫って来る年の瀬、何かにつけても、あわただしい。町は年末

大売出しで賑わい、ジングルベルの音楽もかまびすしい。オリエンピックが終れば、首相の交代。ベトナム・コンゴでは戦争を戦乱のやむべくもない。

☆それに教ふれば身延山は、散りそめた全山紅葉の中、聞えるものはお題目の太鼓とさえする鳥の声ばかり。おとずれる冬の静寂。全く別天地という感が深い。

☆この中にはあって、次の時代を背負う身延の学生僧は、何を考え、何を行すればよいのか。冬休み、今までの例では地方街頭布教に出動するのだが、今度は醒悟園本妙庵にこもって、みずから行学研修に沈潜する。やがてこゝから立正安國を雄叫ぶエネルギーが爆発して行くことだろう。

昭和三十九年
通巻第十七号

第二卷第十一号

定価五十円

昭和三十九年十月二十日

昭和三十九年十一月一日

編集兼発行人

日

高白

印 刷

印刷所 甲府市中央二丁目五ノ二三

天野謙写

堂

発行所 甲府市朝日三丁目二番地

妙寺

内

鷺峰会

電話(甲府)一局五五八五番

振替(甲府)二〇九三

半年分 三〇〇円(共)

一年分 六〇〇円(・)

番

鷺峰

賛助会員

一年分 三〇〇〇円(分納可)